



競奇書目四

遠
1805
4





龍守遺稿 卷の四

天祐

龍馬山と大和郡との間小岩谷所へ龍守は
 下城小川上流年若初の名八全給玉を
 奪りて訪も寺小入一日傍石を音おわく異人
 年長ふあさふ小銀柳とよふて大岩をたふす
 護神さんへて後河内とて信じてまふ
 主判頼の法を別十年若くは龍守とて
 後よりて益物とてまふてふ人其心



競 奇 遺 聞 卷 の 四

天 物

鞍馬山と奥布祓との間小岩谷あり名を倭正谷と
 云世々傳ふ源牛若祓の名ハ今於王九年迄の礼を
 遁れて鞍馬寺小入一日傳正なる少む異人小遇ふ
 牛若小者ふ小鈕袂をもちて且盟く云茲今於王の
 護神をんとす後時異人と傳正なる名小遇ふ言
 する刺較の法を習ふ牛若とてより輕捷とありの
 言ふも益精一十百兼ふ及んと奥加ふ行



競 奇 遺 聞 卷 の 四

懐心及び慈悲の心を以て天物を以て不潔の物と
紀僧正ハ其の意を以て大徳心を起し其の意を以て
群衆を以て同く横川の松小翔を慈恵と甲冑を着
して三井寺を攻め千手院を焼又覺鍬魔心成
起して佛法院を營はる形心の元徳にうりまを以て
其の獲る房を攻め其の獲る房を以て不潔の物と云
われり其の意を以て其の獲る房を以て不潔の物と云
元徳大少叫んで批裡あり次天物を以て不潔の物と
云われり其の意を以て其の獲る房を以て不潔の物と云


一々これハ是覺鍬へし目と怒り一人を睨み火を以て
雨を燒中ハ燒くを以て其の獲る房を以て不潔の物と云
昂身成佛の印を以て其の獲る房を以て不潔の物と云
又和州堯信天物の言を以て其の獲る房を以て不潔の物と云
これ中の院に僧都と字屠巫祝豈能これを降也や
神力ありて其の獲る房を以て其の獲る房を以て不潔の物と云
之れも歸終ふ及んる多の魔撓ハ遭ふ塔にうり
こりゆ之小野文觀ハ天子を初めを以て其の獲る房を以て
元弘の乱の起り或ハ疎石妙音を以て其の獲る房を以て

義直同胞の恩と先師直師泰をくく君臣の
礼を乖しむらうもまうく教業の所為く近江細川
勝元嗣る一也室山小初うて政元と彦一政元
管領とるも際死して宗とるをあれと宗と祠と
建るあれ也室の業術大席の属あり貞如を
出羽五羽黒山の山伏名ハ雲景とつあつて終る小
初んとて老山伏小遇りて誘引せり也室山小
初る一産中小吳傳つるをるるかれ告て云是所習
舌胎真海寛初慈惠頼豪仁海ちそ上の産の

人ハ狭路帝井上皇后も衣龍と号し日月星と
繡ありつひを令笏と持し崇徳院金の器と成て
大翅と展源為朝ハ弓葉江横とくも傳ふくも
後多羽院後醍醐帝も多席を同くも各世も
治乱興亡のそを法が已めして各宗傳らんとした
老山伏告てあつた大席場が居所なりも各宗夢の
てゆくやうて告るるも此惘然とて大内の舊跡掠
乃本のト少なり

巨勢金固



招坐画


小三流と書し老翁小誠一息後の流る事今に
 始り昔弗興つが流の流を早小雨を乞ふ民を回漫せ
 むられの流小一人の畫師なりそ此やその流の流
 妻と求んと彫一うが何志ぞ一 登眼一はる後
 乃内小一人の美女ありそ汝年長妻成おひ引ふ敏
 那りとて今より一そけ取の家宮たんとそよそ
 行粧 飾小文女のめく佩王金釵を麗一 流繡
 と帯一 羅縵を粧小畫工のそく君をあれ庶人民家
 乃婦小絶ぞびうぞうられ小娘きんやしつ小女答てま

婦人ハまれ夫流を論ぶうは只も心操をそのひ
 のそけり君汝の月婦を撰んそ軍ぞ求ゆぞわれ
 幸小又るられ公小娘きんゆ小存をのめ必ず入りんよ
 流子大小流そ流ハ必を盟詞を流ハゆそそ己うそ
 小釵を解く與一そ女を慶る也有くかの流を推乃ハ
 流るそ息ハ後ハ忽ちそふり流工大小嘆息して責て
 の事一小そ流を忘れぬふと流小写一 碑小無それハ
 後中の姿小のそかり流能似う流工のそ流流そ
 終末却もそ流流そびうそ相三日そ早飲食終ひそそ

哀慕の痛の底に却つて有ればゆふ及んで疲果て
 少く松を飾り以て飾らば女又夫つて何とてさす小児
 公の母にまゆやられ髪幼小短き事りてをさそてたり小
 件の短力と持たふ一の酒壺を掲ぐお筆やられ筆工
 及く松髪ひく良えくを静めておの女をさすの
 夕れ玉帯の以午と名尼を小簪婢娟の髪青蛾乃
 眉佩帯玉趾あつ所を拵持らる小實の人こそ
 必夕阿とくしお淑教お所をりれをさす六是神仙
 我小お福を與人とて事れ者老とて察却りれば

則率ひて室内お入れ件の宝壺に酒を汲んで借老
 乃松をさす初々こそ水もゆぬお興火善炊の言
 たり信杵紡績の業まても張るくお賂ひ一とせ
 くらり小書工むり小十倍一お富てととせを経れば
 一人の男子を儲けりりるにさるぐけりおと大切小おぐき
 育り子傭の小児小異るまて幼り聰明叡智世とふこれ
 小思ひ出むり一毎一毎が形を尋ねる小使お給しけ
 見の玄毎の貌ハ写らんもらうおん父の形と某写おん

王偉義たいふとらる大吏たいふあれ之父母ちちうはをみりて終ま終まを
御みりられを控くわ輿いとらるごと異い國こく勳い策さく小こ書しよれり
然しかれハ今いま賢けん聖せい降くだりり乃すなは像さうも魂たま入いるおのりし
守しゆ護ご一いつ倭わ者しやを懲ちやう一いつ世よの固かたとて成なりぬる

生馬仙人

生馬いくま仙人せんじんと稱なづ津つ國くに信のぶ吉きち縣けん人にん之の河かう内うちの言こと多おほ敷し
お入いり東あづま山やまの深ふか谷や小こ竹たけ正ただ實じつ平へい九く年ねん斗と撒まれ像さう
の達たつとて考かんがあり東あづま山やまの嶺ね小こ山やま一いつ菴あんの谷や中ちゆう小
阿あるををんんりてそ所ところ不ふ別べつる小こ菴あん中ちゆう小こ人にん有ある教きやう也なり

黄粟わうりやく五ご粒りやくより白しろ帽ぼうを披ひ素す衣いを着きり向むかひ
何なに人にんとや言ことくられは生馬いくまの仙せん人にん之の侍さむらい小こ竹たけ正ただ實じつ平へい
あねををりて向むかひ達たつお味あじををりて子こは尻しりはは地ち小こ竹たけ正ただ實じつ平へい
飢うを瘠しやくれ喰くふ味あじ甚しん美び之の味あじ又また問とふて
公こう羽うををりて居いる年ねん一いつ何なにぞぞわらら生馬いくま仙せん人にん答こたへて云い
われ小こ竹たけ正ただ實じつ平へい九く年ねん斗と撒まれ山やまの藤ふじととんん次じ
向むかひ達たつ帰かへりて筆ふでををりて

唐船漂著

迺なり平へいををりて城しろ東とう郡ぐん横よこ次じ賀が乃なり城しろ南なん今いま津つ浦うら

十二月四日船碇海軍の唐船標を浦人強奪す
之生るる船の長九千間計上格子通ハ赤く下の方
水際為白く油を灰みかめりてこのものにて
帆柱大を舟船の中なりけりけりの中約五分
餘あり長一尺中一尺計若くは帆柱五分船の方
これ柱の本五色の吹板二半船の方五分幅を中あり
赤白く中五分筋程を繩の如くしてりて舟
異格ふんこの船中うへに漆敷を唱りしけりの方を
招きし格ふんこの船中うへに漆敷を唱りしけりの方を

いししはま法を出馬と見分る一書小横江矣乃
役人弓三千張鉄炮四十挺各程々緋の袋不入城され
紋有り又甲冑を持せりも公府警衆はあきなり
鉄炮乃將率あき肩小苗革を懸諸人トい交
横江の城に西南を席船形田と湊村よの浦場
磯邊よりと十斗沖小掛る同り横江の法士甲
冑兵具持せ組子ハ弓鉄炮上下四百餘人を肩助浦
空張り頭事するのハ幕中に陣烈一將率弓
鉄炮を備へ浪舟渡ふるびあふ入兵飲肉

浦し松本海集めて大船を焼翌五日掛川より諸士
 上下音解人無名石火矢お士平お持せ其後雁代村へ
 出遣あり此雁代村は太郎助新田より一里半西なり 六日早稲俣村の諸士
 十五張浮炮廿五挺大筒をどおせ人救九二百人此のころ
 小島村へ出遣あり此小島村は雁代村より二里半西天竺川の下東なり 右四面所
 西の邊の上船より船中乃松子お細ひは長業あり
 往來の高船より船中の人救八十人書翰を以て
 たう小間谷あり糧米薪水盡くけ方のたを
 既ひあつとゆゑ書翰をきく人なき事と

おあつと酒流のころ碓も控船も多し是難儀に俤
 只け方乃助をもちおとて八日横濱から水新
 米をり送りぬ又公令ありて商人も上陸せぬ
 一の事ありて薩重小碓も小幕を并せ圍ひ唐人
 入るを設け東乃方あり横濱を尾家乃諸士
 西乃方あり懸川に結せ松本より信打海まで並きて
 船を縛り小舟をもちて唐人をも運ひ小舟
 各具お忍れぬといふ上陸して一集を辞返の俤
 ようて書とらう風波の強も是事なく達て上陸

競志選聞卷之四

競志選聞卷之四

競志選聞 卷之四終

競志選聞

